

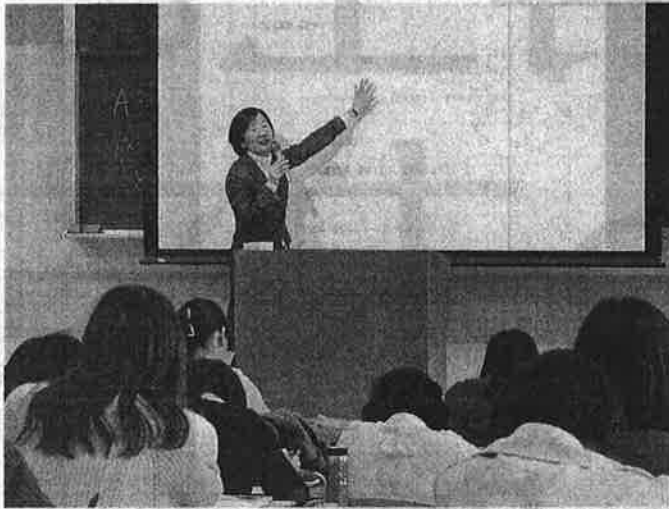
希望職種からは程遠く

田「こんなはずじゃない」

明るくなった空を見上げ、深夜勤務を終えて自宅へ向かう男性(さん)(24) 近江八幡市は、ため息をついていた。希望の職種ではなく、家族と食卓も囲めない日々。思い描いていた社会生活と違う。入社から2年半、自分をたまたましましやってきたが、将来を考えると離職への気持ちは傾いた。

「えっ、工場のライン作業ですか?」。入社して間もなく、配置発表に言葉を失った。滋賀県内で開発やサービス業を幅広く手がける会社に就職した。「企画とか管理とか、そういう仕事をやりたかった。大卒だから、できるものだと思う。家族との時間を大事にしてきてUTターンし、念願の地元企業に内定をもらって喜んでいただけに、落ち込んだ。「まさか

働いてはみたけれど



就職活動を控えた学生たちへのNPO法人あつたかサポートの出前授業。社会保険労務士が雇用環境や労働法など知っておくべき知識を伝えている

(京都市東山区・京都女子大)

若者の「自己実現」に危うさも

深夜勤のある3交代制で工場勤務をするとは。求人情報の業務内容には「ものづくり」の文字はあったが、夜勤についての詳しい記載はなかった。

深夜勤務は「新人のときだけかな」と思ってもみたが、今後、希望の部署に異動できる保証もない。今年夏、辞表を出した。

企業説明会や面接で良いイメージを持って入社しても、思っような働き方ができずギャップに苦しむ若者が増えている。日本では、会社に入るとは「メンバ―」になること。職種ががちり決まっているケースは少なく、解雇されにくい、どこへ配置されるか分からない、というのが日本型雇用の特徴。社会保険労務士でつくるNPO法人あつたかサポート(京都市下京区)の笹尾達朗事務局長は話す。「多くの人が希望の部署で働けない現実を、キャリア教育で伝えていないのでは」と指摘する。

同NPOは、自己分析や夢を考えさせるようなキャリア教育とは一線を引き、「現実を知ってもらう」「ことを重視している。高校や大学での出前講座では、雇用の現状、知っておくべき労働関連法などを説く。

就職する側の意識にも離職の一因はありそうだ。京都産業大の松高政准教授(教育社会学)は「学生たちの働くことへのイメージは何かあふあわわわいて、具体的につかめていないの

ではないか。世の中は不完全で理不尽なもの。企業は利益を追求しなければならず、当然厳しさはある」と語る。

松高准教授のキャリア教育は、地元企業の若手社員と学生で事業を展開させ、実際に仕事することを体験してもらおう。あえて社会の矛盾を教え、採用活動の問題点も話す。

自身のやりたいことを語り、会社に求める気持ちや強い学生も目立つという。彼らが抱く仕事への価値観は「自己実現」。松高准教授はそこに危うさも見える。「本来、仕事とは、社

会や日常生活をつくるために、働ける人が支え合っている。一人よがりな自己実現は趣味にすぎない。社会に出て働くということ、はき違えていないか」と語気を強める。

そもそも働くとはどういうことか。学生に限らず、その根本を考えなければならぬ。「(就職して)置かれた場所できかに自分の強みを生かして人の役に立てるか。その試行錯誤を重ね、人は成長していく」。

松高准教授は、働くこと本来の苦勞と喜びを知ってほしいと願う。

(小坂綾子)